

企画フォーラム5
「アートは地域に何をもたらすのか？
—オルタナティブな公共性の創造—」

◎企画フォーラム開催趣旨

2000年の大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレに端を発し、日本各地で国際芸術祭が開催され、地域名を冠したアートプロジェクトや国際芸術祭が展開されている。また2012年より始動した東京都美術館のアート・コミュニケーター「とびラー」を始め、川崎の「ことラー」や「札幌アートコミュニケーターズ」などアートコミュニケーション活動が、各地域に波及している。これらは自治体主導であることが一般的で、地域が抱える課題の解決や地域活性化、文化資源の観光化など複合的な目的やミッションが含まれがちである。一方でそれらの活動は、実際には市民によって支えられ、地域コミュニティの創造につながっていることも多い。

本フォーラムでは、それをオルタナティブな公共性の創造として捉え、芸術祭やアートコミュニケーション活動が地域にもたらした意義と課題について議論した。

◎登壇者

小坂有資（香川大学/共同代表者）

後藤努（アート芸術祭研究家/共同代表者）

藤原旅人（東京藝術大学/代表者）

吉水由美子（アートコミュニケーター/独立研究者/共同代表者）

三宅美緒（アートコミュニケーター/独立研究者/共同代表者）

◎企画フォーラムの構成

前半：

趣旨説明＋話題提供① 藤原旅人

「サポーター活動から展開するオルタナティブな公共性から市民自治へ」

話題提供② 後藤努

「瀬戸内国際芸術祭の勝手サポーターについて」

話題提供③ 小坂有資

「マイノリティ問題をめぐるオルタナティブな公共圏—瀬戸内国際芸術祭における豊島の事例を中心に」

話題提供④ 吉水由美子

「アートコミュニケーションの現場から—川崎市「ことラー」の地域愛と自発性に基づいた活動」

話題提供⑤ 三宅美緒

「文化事業終了後のアートコミュニティ—札幌アートコミュニケーターズの事例を中心に」

後半：ディスカッション＋フロアも交えた質疑応答

◎フォーラム実施による成果（整理された論点、新たに浮上した課題、今後に向けた提言など）

当日は、40名弱の方々にご来場いただいた。

企画フォーラムの内容としては、趣旨説明を行い、そこから順番に登壇者5人の事例を発表していった。前半の3人は国際芸術祭の観点から発表を行った。藤原旅人は、埼玉県さいたま市で2016年から展開しているさいたま国際芸術祭のサポーターを事例に取り上げ、自主的に進めているサポーター活動を丁寧説明しながら、サポーター活動が市民参加から市民自治へと移っていく過程を明らかにし、このことが、アートが地域社会にもたらしたものであると指摘した¹。



写真1: 当日の様子 (藤原旅人撮影)



写真2: 登壇者全員の記念撮影 (長津結一郎先生撮影)

後藤努は、自身の活動を説明しながら、市民が「勝手に」活動を展開する勝手サポーターについて言及し、アートが地域を変える可能性や、地域の市民が動き出す機会になっていることについて言及した。また、小坂有資は、瀬戸内国際芸術祭が参加地域の一つである豊島を事例に、N. フレイザーの公共圏論と正義論をもとに分析し、豊島住民によるガイドツアーやアート活動がオルタナティブな公共圏を形成していることを指摘した。

後半の吉水由美子と三宅美緒は、アートコミュニケーションに関する説明を行いながら、神奈川県川崎市で展開する「ことラー」と北海道で継続する「札幌アートコミュニケーターズ」の事例から、アートが地域に何をもたらしたのかについて言及した。吉水は、ことラーの自発的活動である「ことラボ」事例を参照しつつ、地域の文化芸術資源の再認識と人的関係性の強化を経て、地域への愛着とつながる楽しさが、アートが地域にもたらしたものとして残ると結論づけた。三宅は北海道札幌市で展開した札幌アートコミュニケーターズの活動を現在の任期終了後まで調査し、アートが地域にもたらしたものを「横並びの目線でゆるくつながる関係性」と結論づけた。

後半のディスカッションでは、5人の登壇者が並んで、「アートが地域に何をもたらしたのか」という点について、お互いの考えを改めて述べていった。

そして、フロアを交えた質疑応答では、3名の方から質問を受けた。質疑の内容としては、(1) アートコミュニケーター活動参加者の専門性について、(2) 各事例の課題について、(3) 参加者の多様性を担保する取り組みや日本語が母語でない参加への取り組みについての質問があり、フロアを交えた議論が展開できた。今回の企画フォーラムでは、アートが地域にもたらしたものについて各発表者が言及することができ、一定の成果をあげることができたと考える。何より、企画フォーラムに至るまでに合計9回の打ち合わせを重ね、ここでの議論や対話が各登壇者にとって重要であった。引き続き、継続的な研究調査を行い、アートは地域に何をもたらしたのかについてさらなる議論を展開していきたいと考える。

¹ 本研究(藤原旅人発表)はJSPS 科研費 JP23K12064 の助成を受けたものです。